

結婚は人生の一大事

侯徳雲

(訳 横田勤・萩田麗子)

田舎へ帰ったとき、村の入り口で王淑花^{ワンシュウファ}にばったり出会った。彼女は丸い顔、丸い胸、丸い尻のふっくらとした体型に変わっていた。背丈は十年前とほとんど同じだが、体重は少なくとも二倍はあるだろう。幸いにして私はまだ彼女だと見分けることができた。

王淑花は私の小学校の同級生で、それに一年間席を並べて座ったこともある。就職したあとは彼女を見かける機会はほとんどなくなった。考えてみれば、毎回田舎に帰るといつもあわただしく過ごしていたので、見かけなかったのも当たり前の話だ。

私はうれしくなって彼女に声をかけた。「王淑花、いま何してるんだい？」

彼女は一瞬ぽかんとした。そして立ち止まり、目を細めて私をじろじろ見た。少なくとも二分間ほどはじろじろ見て、それからちフンと鼻で笑い、一瞬うれしそうな顔をしたのにすぐに不愉快そうな顔になり、太ったメスブタがブーブーいうような声でぶつぶつ言うと、急ぎ足で立ち去った。そして何歩か行ったあと、振りかえらずに私に向かって言った。「ちっともご立派じゃなくせに！」

私は振り向いて彼女の肉付きのよい後姿を見た。どうして彼女がぶつぶつ言ったのか、気になってしかたがなかった。いったい彼女のその言葉に、どんな意味があるのだろうか。

憂うつな気分になって家に帰った。兄はオンドルの^た焚き口の近くでタバコを吸

っていた。私は兄に^{ワンシュウファ}王淑花との一件を話した。「ちくしょう、僕がいったい何を
したっていうんだ」

兄はあわててタバコを一、二回吸って、ため息をついた。

兄は何か知っているな、と思った。私は目を大きく見開いて兄が話しだすのを
待った。

しばらく黙っていたあと、兄が口を開いた。「お前は知らんだろうが、王淑花
の家と我が家は仇どうしになっちまったんだよ」

ええっ？ 私は驚いた。そんなこと、私が知るはずがないではないか。

「ああ、もうずいぶん時間が経ったからな、言っても問題はないだろう」

兄は話しはじめた。兄の最初のことばで、私は高校のころのことを思いだした。

私が高校三年のときのできごとである。そのころ王淑花の父親は村の共産
党支部の書記であり母親は小さな店を営んでいた。彼女はその店で働いていた。
ある日、彼女の母親は通りで兄を見かけると、まじめな顔で言った。

「あんたのところの^{ラオウ}老五①(主人公「僕」を指す)には決まった人がいるのかい？」

兄は答えた。「いないよ。まだ学校に通っているんだから」

王淑花の母は喜んだ。「そりゃ良かった。うちの王淑花はどうだい。もしよけ
れば今すぐに決めておくれ」

兄は言った。「老五はまだ学校に通っている身ですよ」

「通ってたっていいよ。まずは決めておくれ決めておいて、すぐに結婚させ
ることはないから」

兄は強く迫られて言うことも言えず、しかたなくあれこれ言葉を濁した。「家
に帰って相談してから言いますよ」

王淑花の母は喜んだ。「それがいい。返事を待ってるからね」

どうなったかという、兄は家に帰り、誰にも言わず自分一人で考え、この話は無しということにした。王淑花ワンシュウファの母親が後日返事を迫ったとき、兄はまたあれこれと口を濁した。それからどうなったかという、その後、王淑花の母親はもう返事を聞こうとはしなかった。兄の顔を見ても、話しかけさえしなかった。

兄が言った。「老五ラオウ、あのとき俺は考えたんだ。お前は大学に合格して都会の人間になる。どうしていなかの嫁さんをもらうことができるんだい？」

私は嫌な気分になり、沈んだ声で、一言返した。「兄さんにはどうして、僕が大学に合格できるとわかったんだい？」

兄は口を大きくあけて笑った。「何言ってるんだい、お前、合格しなかったのかい？」

私は兄のやり方に不満だった。私の結婚という一大事を本人に言わないなんてあんまりだ。なるほど、占い師が「あんたはとってもいい縁を逃した」と言ったことがあったが、こういうことだったのか。占い師に口答えして「あんたはでたらめを言っている」と言ったんだが、今にして思えば、あの占いは本当のことだったんだ。

私は気分が良くなかった。たばこを吸っても気分が良くなり激しく咳こんでしまい涙が出てきた。私は言った。「兄さんは大変な間違いをしたよ」

兄はちょっと私をにらみつけた。不満げなのが見てとれた。

私はわざと話題を続け、兄に尋ねた。「王淑花の旦那は何をしている人？」

「村長だ」

「きっと大金持ちなんだろう？」

兄はちょっと考えて言った。「そうだろうな。三階建てのビルに自家用車が一

台」

私はまた一回咳ばらいをして言った。「その村長の職は、もともと僕のものになるはずだった。三階建てのビルも自家用車も、もともとは僕のものになるはずだった。大金持ちになったのは僕で、彼じゃなかったはずだ！」

兄は何も言わなかった。だが私の話に納得していないように見えた。しかたなく私は「仮にそうだったら」と言って話を続けるしかなかった。

「仮にだ、僕が村長になったとしたら、海辺のそばのあの数万畝^ムの土地活用を、兄さんは自分の思ったとおりに請け負うことができたんじゃないかい？」

兄はうなずいた。

「仮にだ、兄さんが請け負ったとしたら、今は兄さんが大金持ちになったんじゃないかい？」

兄はまたうなずいた。

「兄さんだけじゃなくて、二番目、三番目、四番目の兄さんもみんな大金持ちだ」

兄はちょっと目をしばたいて、突然言った。「老五、お前が街でちゃんと生活してさえいれば、俺たちがここで苦勞したって何てことないさ」

ああ、何を言ってるんだ。

私は怒りを覚えた。「兄さんは街にいるのがいいと思ってたのかい？」

兄はとても驚いた様子で言った。「老五、お前、街に住んでいて良くないのかい？」

「良いよ、村長の足の指先にも及ばないほど良いよ」

兄は黙ってしまった。長いあいだ黙っていた。そしてやっと、ゆっくりと言った。「老五、兄さんは今、ものすごく後悔してるよ。」

このできごとは私の心に大きな黒い影を落とした。このあと数か月間ずっと、

気分は晴れなかった。私は王淑花^{ワンシュウフア}のことを恋しく思いはじめた。なぜだか分からない。ただ彼女に会いたかった。王淑花よ、王淑花よ、お前に会いたいのを、君は知っているかい？

半年後、兄が突然電話をしてきた。そして大喜びで言った。「老五、お前、俺に感謝しなけりゃならんぞ。俺がいなかったら、昨日、お前が逮捕されていたんだ」

①老五^{ラオウ}……中国では兄弟姉妹を呼ぶとき、老のあとに数字を付けて老大^{ラオダー}（いちばん上）、老二^{ラオアル}、老三^{ラオサン}のように呼ぶ習慣がある。固有名詞のように使われることもある。

②畝^ム……土地の面積の単位。1畝は15分の1ヘクタール。

（『2010年中国微型小説精選』長江文芸出版社，武漢市，2011，pp. 4-6.）

（中国語原文）

婚姻大事

侯德云

回老家去，在村口遇上了王淑花。王淑花变得富态了，圆圆的脸，圆圆的胸脯，圆圆的屁股。她的身高跟十年前差不多，而体重至少是从前的两倍。好在，我还能认出她来。

王淑花是我的小学同学，还做过一年的同桌呢。自从我参加工作之后，就很少见到她了。想想也是，每次回老家，都来去匆匆的，见不到也很正常。

我很高兴，主动打声招呼：“王淑花，你干吗呀？”

王淑花愣了一下。她停下脚步，眯着眼睛打量我。她打量了至少有两分钟，然后，呱嗒一下，西瓜脸变成了冬瓜脸，还像老母猪那样哼哼了两声，快步离去。走出几步之后，用后脑勺对我说：“你有什么了不起呀？”

我扭过头，看王淑花丰满的背影，心里特别纳闷儿，她的哼哼，什么意思呢？她的那句话，什么意思呢？

我闷闷不乐回到家里。大哥在炕头上吸烟。我对大哥说了王淑花事。我说：“他姥姥的，见了鬼了，我又没有得罪她。”

大哥猛吸了两口烟，接着又叹了一口气。

我觉得大哥好像知道些什么。我瞪着眼睛，等他说话。

沉默了一会儿，大哥开口了。

大哥说：“弟呀，你是不知道，王淑花家跟咱家，结下仇了。”

嗯？我很吃惊。我怎么不知道啊。

“唉，”大哥说，“怎么多年了，说说也无妨。”

大哥打开了话匣子。大哥的第一句话，就把我变成了一个高中生。

是读高三的那年发生的事。那时候，王淑花她爹是村支书，她妈经营小卖店。王淑花是小卖店的售货员。某一天，王淑花她妈在街上碰见大哥，一本正经对大哥说，你们家老五，有对象没？大哥说，没，他还在上学呢。王淑花她妈乐了，说，那就好，看看俺家王淑花怎么样？愿意的话，现在就定下来。大哥说，老五还在上学呢。王淑花她妈说，上学就上学呗，先把事定下来，又不是让他们结婚。大哥逼得无话可说，只好支支吾吾说，回家商量商量再说吧。王淑花她妈又乐了，说，那好，我等你回话。

结果呢。大哥回家，跟谁也没说，他自己跟自己商量了一会儿，决定不攀这门亲事。王淑花她妈日后又追问过几次，大哥都支支吾吾的。后来呢，后来，王淑花她妈不再追问了，见了大哥的面，连话也不说了。

大哥对我说：“老五，当时我是这样想的，你考上大学，就是城里人了，怎么能娶个农村的媳妇呢？”

我闷声闷气地回了一句：“你怎么知道，我肯定能考上大学？”

大哥咧开嘴笑了：“看你说的，后来你不是考上了？”

我对大哥的做法很不满意。我的婚姻大事，连我都不告诉，太过分了。难怪算命先生说我错过了一桩大好的姻缘。我还跟人家犟嘴呢，说人家胡说八道。现在看来，这是真的了。

我心里不痛快，烟也吸得不痛快，猛一阵咳嗽，咳得眼泪都出来了。

我说：“大哥，你犯了一个严重的错误。”

大哥的眼睛一下子瞪起来了。很明显不服气。

我故意把话题扯远，问大哥：“王淑花的男人，现在是干什么的？”

大哥说：“是咱们的村长。”

我说：“他们家，是不是富得流油？”

大哥想了想说：“好像是。三层小楼，还有一辆小轿车。”

我又咳嗽了一声：“那村长，本来应该是我的。三层小楼，小轿车，本来也应该是我的。应该是我在流油，而不是他！”

大哥不吭声了。看样子，还是想不通。没办法，我只好跟他“假如”一番。假如，我当上了村长，咱村沿海的几万亩滩涂，你不是想包多少包多少？大哥点头。假如，你承包了滩涂，现在不是也流油了？大哥又点头。

我说：“也不光是你，二哥，三哥，四哥，也都会流油。”

大哥眨巴了一会儿眼睛，突然说了一句：“老五，只要你在城里过得好，我们在家吃点苦没关系。”

嘿，瞧他这话说的！

我很愤怒：“你以为在城里就好么？”

大哥很吃惊的样子：“老五，你在城里不好么？”

“好，”我说，“好得连村长的脚指头都不如。”

大哥沉默了。沉默了很久，才慢悠悠说了一句：“老五，大哥现在肠子都悔青了。”

这件事给我留下了很大的阴影，以至于此后的几个月里，我一直闷闷不

乐。我开始想念王淑花了。不知道为什么，就是想她。王淑花呀王淑花，你知道我在想你么？

半年之后，大哥突然打电话来，兴高采烈对我说：“老五，你应该感谢我。如果没有我，你昨天就被逮捕了。”

□□□□□